
Doorから始まる！

虹雪まい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Doorから始まる！

【Nコード】

N0388P

【作者名】

虹雪まい

【あらすじ】

予習放棄。復習不足。定期テスト。勉強地獄。休日満喫。カラオケ三昧。テスト返却。自信喪失。やる気増大。三日で喪失。友人増加。恋愛皆無。それでも楽しい。高校生活。

…そんな毎日を、当たり前のように過ごしていた。

No.1 〱闇〱(前書き)

この小説は多人数視点で進んでいきます。ところどころ至らず、誰の視点で進んでいるのかわからないところが生じるかもしれません。が、その際は指摘していただければな、と思っています。よろしくおねがいします。

No.1 く聞

8月20日、午後6時25分。

「あーっ、疲れたあ・・・」

椅子に寄りかかり、セーラー服の女子生徒がこぼす。

「そうですね。もう3時間も、こうしてるわけですし・・・付き合わせちゃってごめんなさいです、えみポン。」

「うっん、いいのいいの。どうせ家に帰ったって課題放棄して寝るだけなんだし。」

「それはえみポンが学校で毎日課題こなしちゃうからじゃないですか・・・」

笑いあって、一人が立ち上げる。

「ま、そうなんだけどね・・・区切りいいし、そろそろ帰る？」

「はい。そうしましょうか。」

No.1 く聞

市内有数の進学校・・・の2ランク下に行く高校、市立雲海高等学校。

その図書館に閉館ギリギリまで居座る事で有名な二人の女子生徒がいた。

「しおー。お腹すいたからミスドナルト行かない？」

茶髪で前髪をちょんつと結んだ不良っぽいのはこれでも学年トップ、勝ち気で元気な白崎恵美。通称えみポン。

「いいですねー！あ、でも私お金あるかな・・・？」

黒髪で二つ結びのおとなしそうなのは、控えめで万人に敬語、いつも笑顔の岡崎潮音。

「あ、そういえばこの間、教材費借りたの、私今日返そうと思って持ってきたんだ。ほんと毎度ごめんね潮音。」

「あ、忘れてました。大丈夫ですよ、えみポンは絶対返してくれる人だって思ってますから。」

にこつと笑顔を向けられ、恵美は嬉しそうに笑う。

「ありがとうございます・・・！ちょっと待ってね。」

「はいっ。」

「・・・」

「・・・」

謎の沈黙。

「？」

しばらく立つたまま鞆をぐそぐそやっていた恵美は、どかっと廊下に座り込むと鞆を逆さまにして中を探し始めた。

「あ、あの・・・もしかしてなくした・・・とか？」

「いや、そんなまさか・・・」

「でもないんだったら困るんじゃない・・・」

「ああ！」

「ふえっ！」

急な大声に、潮音は驚いて奇声を発し、目をしばたかせる。

恵美は潮音の方を見てほっとしたように微笑むと散らばった道具を鞆にきれいに詰めて立ち上がった。

「・・・教室に財布ごと置いてきちゃったっばい。そっぴやさっき、中身確認したくて出したんだ！」

「・・・びっくりした。・・・でも、それならよかったです。」

「取ってくるから待っててくれる？」

「はい。」

鞆を潮音に預け、恵美は駆け出す。

よいしょと鞆を持ち上げた潮音は、恵美の駆けていった方を見て首を傾げた。

(・・・あれ。)

見やれば恵美、まだ、いる。

恵美はぎこちなくこちらを振り返り、堅い笑みを見せた。

「潮音っ。」

満面の笑み。そして、手招き。潮音は恵美の向かう先の光景を見て、それが何を意味するかを悟った。

階段の向こうに広がる薄暗い闇。そして人気のない廊下。

「・・・怖いんですね。」

「こ、怖くなんか・・・！私が行っちゃったら潮音が怖がるんじゃないかと」

「・・・ほお？」

「・・・ごめんなさい。」

薄暗い階段を、一段一段上っていく。あたしら2-1の教室は、5階建ての校舎の5階に位置する。

「ほんと・・・何でこう、うちの学校はこんなに『出そう』なんだろっ・・・」

「や、やめてくださいよ・・・」

「もう、潮音ちゃんこわがりいつ。」

「・・・えみポンに言われたくないです・・・。口調変わってるじゃないですか！」

う。そ、そんな潮音だつてへっぴり腰なんだから・・・！

・・・って、自分もそうなんだから人のことは言えないんだけど・・・。

更に不運なことには、なぜかこの階段、1階と5階にしか照明の

スイッチがない。

図書館は2階にあるため、行く手はどんどん暗くなるよう。

「ひゃう！」

「にひゃあつ！な・・・何！？」

「す、すみません、つまづきました・・・」

「びつくりさせないでよう・・・」

さっさと上がってしまった方がいいようなものだが、人間の心理はおかしなもので。

みつちり3分間恐怖を味わい、あたしと潮音はようやく5階へたどり着くと照明のスイッチを押した。

> i 1 4 3 0 4 — 1 5 4 7 <

パチッ

「あー、怖かった。」

「あ、やっぱり怖かったですか。」

「・・・う。」

二人、笑いながら廊下を進んでいく。

廊下の突き当たりを右に曲がると教室だ。どの部活動もまだ続いているようで、あちこちの部屋から色々な音がする。

辿りついた教室。後ろの扉のガラス越しに覗き込んで自分の机を見れば、財布がしつかり入っているのがわかった。

「あつたあつた。」

中に入る前に振り返って潮音を見る。

・・・今考えると、その時振り返っていなかったら私は、おそらく今生きてなどいなかっただろう。

「・・・潮音？」

潮音は硬直してただただ教室内を眺めていた。あたしの呼びかけにも、応じる気配はない。

「潮音ったら。」

「・・・えみポン。」

「え？」

潮音はそつとその右手を挙げ、ゆっくりと無表情のままあたしを見たと教室内を指さした。

「私・・・目がおかしくなっただんでしょうか・・・？」

「・・・え、何が？」

教室内を再び見ても、なんら変わった様子はない。

窓の外に何か居るとかそういう恐ろしい話かとも思ったが、特に何もいるわけではない。

「・・・いたら困るけど。」

「どうしたの潮音？よくわかんないんだけど。」

「えみポンには普通に見えるんですか・・・？」

「え・・・？」

少しイライラしてきた。この教室の、何がおかしいと言っただ。すると潮音は、耳を疑うようなことを言ってきた。

「・・・私・・・この教室の中・・・何もないように見えます。」

「は・・・？」

意味がわからない。

「何も無いってどういうこと？」

「・・・あの・・・なんていうか『これぞ“無”』って感じで・・・真っ暗なんです。教室の中・・・」

からかわれているのかと思ったが、長い付き合いだ。そんなことをする子じゃない事はわかっている。

と、なると本気・・・？でも、そんなことあるの・・・？

「えっと・・・それもし問題あるとしたら目よりも脳じゃない・・・？」

「うん・・・でも、ホントに教室の中だけ真っ暗ってか真っ黒で・・・」

不安げにあたしを見る潮音。

それでも私は、どうもその発言を信じることができなくて。

「もう、大丈夫よ大丈夫！ほら、入った入った！」

背後に回って、どんつとその背中を押す。

「ふやっ！」

潮音はぱたぱたと両手を動かしてバランスを取ろうとしたが、あたしが結構強く押したせいでそのまま教室内につっこんだ。

そして尻餅をついて・・・

「え・・・？」

痛そうな顔をしながら・・・

「い・・・ひあっ・・・」

「何するんですかっ！！」って怒鳴られる。

そのはずだった。

「きゃあああああ！！」

「し・・・潮音！」

潮音が教室に入った瞬間、教室が牙をむいた。

一瞬にして教室内は先ほど潮音が言っていたように真っ黒にそま
り、床が潮音を飲み込んでいく。
今度は私にも見えた。深く黒い闇・・・否。

黒。

「潮音っ！！きゃ！」

閉まるドア。飛び出そうとした私は盛大にはじかれた。尻餅をつ
き、痛みに顔をしかめる。

もう訳が分からない。なんだっていうのよ！

「ひゃあああ！！！」

しばらく呆然とした後、叫び声が耳に届いてはっとする。

何が起きてるかなんてわからない。・・・それでもこれだけはわ
かった。

「潮音！」

「えみポン！！！」

このままじゃ・・・潮音が消えちゃう・・・！

私は立ち上がって鞆を振りあげると思い切りドアをたたいた。

なに、器物破損なんて『アイツ』がいた頃は日常茶飯事だったん
じゃないか。

「いやあああ！！やだ・・・！！いやあああ！！」

まわりつく蛇のような黒に、潮音は抵抗すればするほど床にと
け込んでいく。

わけわかんないけど、とにかく早くこのドア開けなくちゃいけない。

それなのに小窓にヒットしたはずの私の参考書大量内蔵の鞆は空をきった。

「嘘……！」

それなのに触れてみればそこにはしっかり扉。

何度繰り返してもいたちごっこ。

現実から切り離されたようなこの時間の中、沈んでいく潮音に、私はなすすべもなく。

「何なのよ！！潮音！潮音えええ！！」

数分間続いた攻防は、何事もなかったかのような静寂により終結した。

「……」

カラカラと小さく音を立てて勝手に扉が開いていく。

もうさすがに驚かない。それに……よくわからない喪失感が心を満たしていた。

「……どうしよう……どうしよう……」

夢だと思いたくて思い切り頬をつねった。

目の前で起こったことが理解できない。

携帯電話を開いて潮音の携帯に連絡したけれど、反応なし。

あたしが忘れ物をしたから……？あたしが背中を押したから……？

わかんない……わかんないよ……あたしが悪いの？

あたしが悪いの？あたしが……悪いの……。

「いやああああ!!」

「な・・・白崎!?どうした、大丈夫か!？」

「いやああああ!!いや!潮音!潮音!!!」

「落ち着け白崎!白崎!」

叫び声に気づいて駆けてきた先生につれられて、あたしは職員室につれて行かれた。

狂ったように泣きわめくあたしの話を信じてくれる先生は、誰一人としていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0388p/>

Doorから始まる！

2010年11月21日00時40分発行